会員だより No.3

移りゆく風景
～ある耕地整理記念碑の発見～

瓜生隆宏（うりゅう たかひろ）
兵庫県神戸県民局
神戸土地改良事務所

ゆっくりと街を歩くと、思いがけない発見がある。古家が取り壊されて新しくなったようなものは、当然すぐに気がつくのだが、昔からずっとそこにあったはずなのに、はじめて気がつくものもある。

先日、40数年ぶりに懐かしい街を歩いた。風景のあちこちに、古い記憶の断片が残ってはいたが、今回はじめて気がついたものがある。それは街角に残された「耕地整理記念碑」と刻まれた高さ2mほどの花崗岩の碑である。

仕事柄、つい目が引き寄せられたのである。裏面には、「工事着手大正四年四月、事業完成　大正拾年五月、整理面積　第壱工区貳拾九町壹反貳畝拾六歩――」云々とある。この碑は大正10年から、ここに立っていて、私は過去に幾度も、この前を通っていたはずなのだが、あまり記憶にない。我々の記憶なんて、繰り返し見ていたとしても、よほど興味あるものでなければ、あいまいなものである。

さて、気になる「耕地整理」の概要であるが、記念碑によると「神戸市北部耕地整理組合」は大正3年（1914）8月7日に設立され、組合員総数は117名。大正3年は日本が第1次世界大戦に参戦した年である。事業着手は翌年4月で、事業完了は大正10年（1921）5月である。工区は2つに別れていて、第1工区が約29町、第2工区が約8町である。総面積約37haを6年ほどで完成しているから、当時の貧弱な機械力からすると、かなりの人力を投入したのだろう。一方、事業費であるが、残念ながら記載されていない。事業が行われた大正4年から10年といえば、神戸鈴木商店が米騒動で焼打ちされ、株式相場が大暴落して、日本は第1次世界大戦後の不景気の最中だった。このような経済情勢の中では、事業実施が経済的にも困難だったろう。

記念碑には25名の役員の名が刻まれていた。その中にひとりだけ私の記憶にある名があった。代々、この地の庄屋であった「谷勘兵衛」である。彼にはこのような話がある。

徳川幕府は、慶応3年に兵庫の港を開港するに先立ち、そばを通る西国街道が参勤交代の重要路となっているので、4年前に横浜であった「生麦事件」（薩摩藩のイギリス人殺傷事件、のち薩英戦争に発展）のようなことを避けるため、西国街道の迂回路（西国往還付替道）を設けることにした。そのルートは、神戸市灘から裏六甲を縦走し、明石へ至る八里余り（約32km）の山道である。この工事を、徳川幕府は谷勘兵衛に請け負わせた。兵庫開港までに間に合わすため、工事はわずか1カ月で完成しなければならなかった。しかし、明治維新とともにこの道も必要がなくなり、政権交代により工事費の支払いも行われず、結局、彼は私財をなげうって、工事従事者に賃金を支払ったそうである。現在この迂回路は「徳川道」と呼ばれ、わずかに裏六甲の山中にハイキングコースとして残っている。

街角に残された耕地整理記念碑

話が、幕末まで及んでしまった。私も縁あって農業土木という仕事に携わって4半世紀が過ぎ、何気なく通り過ぎる日常の風景の中にも、多くの人々の営みが刻まれていることを、感じる齢になってしまった。農業土木という仕事は、風景を大きく改変する仕事である。長い歴史から見ると、明治の近代化以降、特に高度成長の時期には、その範囲も大規模で、速度も速すぎたような気がする。今一度、ゆっくり歩いてもいいのではないか。そうすることで、また違った風景が見えてくるのではないかと思うのだ。

（2010年5月受稿）